

## 南の島の子どもたち(4)

子どもが変わるに「とき」あり

浅野 恵美子

「すべてのことには時がある」といわれる。とき、それは、私たちの様々な思いをよびます。ときを待ったこと、ときにのれたこと、ときに従ったこと、ときを得たこと、ときをかせいだこと、ときをつくったこと、ときが解決してくれたこと、ときを逃したこと、ときが流れたこと等々が思いおこされる。

ある母親は、中学生である大きな息子がベタベタと母親に甘えるのでとまどっていると話していた。親が忙し

くて、十分甘えさせることができないできた為、今、甘えているのだと思いきえさせているとのことであった。いきりれなかったときが、あらたな「とき」を得て、いきなおされているようである。

又、ある母親は、中学になっても夜尿症のあった娘から激しい批判をくらい、それにショックを受け、自分を深く反省したそうであるが、娘は、それをきっかけに、ピタリと夜尿がなくなったと話してくれた。本当の叫び

を表現する機会が与えられた時、自分の内なる叫びが自覚された時、子どもは、自分らしく生き始めることができるらしい。娘は、「とき」が満ちて、「とき」を得て叫ぶことができたのである。

今回は、沖繩の短大生の「生い立ち」の手記を紹介して、子どもが変わる「とき」について考えてみたい。

### ○律子の場合——ぐれまくって育った親への愛

「私は三人兄弟の真中で、次女として生まれました。

私の母親は、二十代後半で結婚し、さらに四年間、子どもに恵まれなかったもので、半分以上、子どもを持つことはあきらめていたようです。それが、どうした訳か、長女が生まれ、私、長男が結局、年子で生まれたのでした。やはり、年子なので育てる側も、又、私たちも毎日が兄弟喧嘩でたいへんだったようです。特に、私は真中なので、絶えずどちらかと喧嘩していました。

両親は、私たちが生まれる前から共働きでした。で

すから私たち兄弟は、近くに住む祖母、伯母たちに育てられました。特に、母が仕事にでかける前など、幼いけど気づいて母親にべったりくっついたり、おいかけて行き、すぐ泣きわめいたようで、母親としても仕事へ行くのがとてもつらかったそうです。

両親は、日頃から夫婦喧嘩をよくしていました。ある夜、みんなが寝静まっていたことなのですが、両親の喧嘩で私たちが目をさました。当時、幼稚園生だった私は、夫婦喧嘩を聞くのがとても苦しくて、幼いながらに、どうかしたいと思い、わざと寝返りをうったり終いには泣きました。喧嘩は止まるどころか、逆によけいひどくなっていました。それは、私の小さい胸に大きい傷みとして残りました。

母は、私が小学校六年の頃に、三十年近く働いていた仕事を辞めました。私は、小学校までは、ごく普通の女の子として育っていましたが、問題は中学に入ってからです。私はバスケット部に入部しました。私なりに一生懸命がんばり、友達もたくさんできました。

私たち仲良し七人グループは、男の子四人、女の子三人でした。

私たちは、毎週土曜日、家族の人が寝静まってから、こっそり家をぬけだして、友達の家へ出かけていきました。最初の頃は、お菓子とコーラといったぐいであつたが、次第にお酒も飲むようになっていきました。このグループでタバコを吸いはじめたのも私でした。このように生活が乱れるのに関連して、学級生活も乱れていきました。先生に反抗し、よく遅刻し、欠席、ずる休みも時々するようになっていきました。夜おそく帰ったり、無断外泊もよくしました。私は、このように非行の道に走っていくのも両親のせいだと、とても両親のことを責めていました。なぜか、両親を許せない気持があつたのです。そして、父親が家についていないことを利用して、悪巧みをはたらきました。家庭を一人で守っている母を見くだし、さげすみ、口でいいあらわすことのできない言葉でののしり、そればかりではなく、しまいには手を出すというような反抗を

繰り返していました。私は自分の行いを棚にあげ、両親は勝手だと憎みました。

今思うと、本当になんとおろかなことを、よくもまあ、あれだけできたなあと恥ずかしく思うのですが、実際私のやったことなんですね。その原因は何だろうと考えますと、やはり、母親の手で、特に幼児期という大切な時期は育てられるのが一番私にとって必要ではなかったかなあと今、強く感じています。……

あんなに親不幸だった私でしたが、今では自分の口でいうのもおかしいのですが、一番私が親孝行だと思いうくらいです。」

三人兄弟の、年子の真中に生まれたこと、母親が忙しくて十分接触してやれなかったこと、両親の不和があつたこと等、多くの要因が彼女の思春期における人間不信の噴出へとつながっていきました。両親の夫婦喧嘩を止めることができなかった幼な心の無力感、彼女の心に愛されていない悲しみとなって残ったと思われます。彼女は、母親に対して不信任感をぶつけつつ、母親を試し

て、生き方を模索していたのです。得ることのできなかつた信愛感情を求めていたのです。母親が仕事を辞めたことも彼女のあまえを表現しやすくしたでしょう。

### ○正子の場合——仲間の反感に耐えて変わる

「小学一年、家庭内で衝撃的なアクシデントが起こった。それは両親の離婚である。離婚は、子どもの立場からすると実に悲しく寂しいことである。しかし、私の場合には離婚した方が幸福は訪れると信じていた。その原因は、時々父が、母を殴る蹴るの乱暴をするのを幼児の頃から見てきたからだ。そんな残酷なことをする父が嫌いで親だと思いたくもない程であった。

離婚後、母は夜の商売をした。その為、私は、寝る時や朝御飯の時など一人でいる時間が多かった。しかし、母と一緒に暮らせた満足感から寂しい思いは少しもなかった。当時、母は店づくりの為に借金があったようだ。母の顔はいつも厳しくて、小さなことでもすぐ怒ったりして、恐いイメージのする母だった。そ

の反面、母子家庭という立場から、とても過保護に深い愛情を受けて育てられた。

そんな暮らしの中で母に男ができた。私は、その時小学三年生であった。母の表情は、いままでと違って、顔がにこやかになり、明るく毎日笑っているようだった。こんな別人のような母を見ていると、『これは私のママではない。』と複雑な心境におちいった。

母の心は男に全部いつているように見えて、寂しい思いであった。男に母を奪われたという気持ちで、この男に嫌な顔を見せたり、いろんな面で反抗したりしていやがらせをした。母にも反抗するようになった。すると母は、『今まで、食わず飲まず一生懸命育ててきたのに反抗して……』と涙ぐんでいたことを今でも覚えてい

る。小学六年の時、友達とはじめて、グループを作って遊ぶようになった。友達に恵まれて、毎日楽しい学校生活を送った。そこで、自己中心的でわがままな性格があらわになった。その性格は中学一年の中頃、皆の

反感をかった。クラスと一緒に遊んでくれる友達が一人もいなかった。登校拒否をしたい気分にもかかわらず、心を鬼にして一日も休まなかった。本当に、この頃は、つらくて寂しい、苦い学校生活であった。深い暗闇の地獄にいるような中で耐えてこれた自分に驚き感心している。もし、この体験がなかったら、意地悪でわがままな自己主義人物のまままでいたのかも知れない。

中学二年には、再びグループを作って遊ぶようになったが、以前の後遺症が残り、口数は少なく他人にすぐく気を遣い、消極的になった。周りの人達がほそほそ話しているのを見ると、自分の悪口を言っているのではないかと何事にも自分の不利な方へと想像した。こうしたことで毎日が重い生活を送り、一日がとてもなく精神的な疲れがひどかった。その頃、母は以前の男とは別れて別の男の人と付き合い、結婚にまでいたった。私の二度目の父である。母の老後のことを考えると賛成するしかないと思った。今ではとてもよ

かったと思う。義父は私を自分の子どものように育ててくれ、母は働くことなく楽にすごし、精神的にも落ち着いていった。

高校生になると、自己を深く見つめるようになり、特に性格については強く意識した。いろんな人に接したり本を読んだりして自分の心を育てた。これによって、以前に比べて明るく積極的になり、はっきりと自分の意見が述べられるようになった。しかし、真実の人間としてはまだまだである。……」

正子が自己中心をのりこえていったプロセスが良くわかる。健全な自己愛が育っていたことが、仲間の反感に耐えることを可能にし、彼女の性格変容のターニングポイントとなったのである。

#### ○松枝の場合——先生を泣かせて変わる

「五年生の時、先生と大喧嘩をしまして六年にあがったのですが、担任の先生は、とても感じのいい先生で、私はすぐに先生が好きになりました。



そんなある日、夜中に両親が話し込んでいる声が聞こえ、何気なしに聞き耳を立ててみると、どうやら私のことらしく、母は担任の先生に何ごとか指摘され、自分の育て方が間違っていたのではないかというふうな話でした。母がつまづき悩んだことなど今まで目のあたりにしたこと無かった私は、その事が心に痛烈

に響いたのです。自分は悪い子どもなんだ。でも先生が、あんな事さえ言わなければママは苦しまなくてすんだのに……そんな思いが頭に広がりはじめたのです。私が悪いのなら私本人に注意して欲しかった。それが悔しくなりません。そんな折も折、先生に対して言いたい事を何でもいから書くように課題を与えられたのです。チャンスだと思いました。『何で私を注意してくれなかったのですか。ママを泣かせた先生を許さない。』こんな風に書いたと思います。

放課後、先生に呼ばれ、反発を表情に装った私は、とても恐ろしい顔をして先生に向かいました。先生の話ののまれてはいけないというかたくなな気持でいっぱいでした。先生は自分が軽はずみに口に出したことを詫び、母に与えた影響を悔やみました。心の底から、私の心が開くのを待っているようでした。けれど、私は先生の目だけを下からにらみつけ、首を振ることすら、ましてや口を開く事などしませんでした。一言しゃべれば、自分がくずれそうで怖かったので

す。『何でも話してちょうだい。お願いだから。』と先生は言いました。長い沈黙の後、とうとう先生は泣き出してしまったのです。私はびっくりしたのと同時に

自分のしでかした事の重大さを思い知らされたのでした。自分も泣いて、心の内を全部はきだしてしまいたい衝動にかられたのですが、どうしていいかわからず、只先生をにらむだけでした。周りに立っていた友達四人でさえ泣き出したのに、私は鬼みたいな子どもだったと思います。先生は、最後の決断として『私の事が嫌いだったら、他のクラスに行ってもいいのよ。……私には、もうあなたを教えるいく自信がないから。』と言い出したのです。私は絶望を感じました。先生に見離されてしまった、捨てられてしまったという思いが胸をしめつけました。そして一番決定的だったのは、先生が初めて私をみた時から『怖い顔をした子。扱いにくそうで困ったわ。』と思っていたという事です。私は、このクラスにきた最初の日、とても嬉しくてうきうきしていた自分を思い浮かべてがくぜん

としました。今でもそうなのですが、私の顔は、いつも怒っているように見えるらしく小さい頃からよく誤解されていました。

そんなことがあってから、『このままではいけない』と私は強く思いました。自己改革を始めました。誤解されやすい自分の顔を仕方無いとあきらめるのではなく、怒っても顔に出さないように気をつけ、自分から友達に話しかけ、なるべく笑顔を絶やさないように努めました。しかし、容姿を変えるのは簡単ですが、心を変えるのはたやすくはありませんでした。いつでもどこか、肩を張っていた自分がいたのです。

今こうして、あの時大きな心の傷を受けたと想っていたことをなつかしく、そして落ち着いた目で考えられることを嬉しく思います。あの時、友ではなく一人の大人が感情をあらわにしてくれた事が、意義深い事だったのではないのでしょうか。……」

先生の前で、自我をひきずって自分を変える「とき」がみつけれなかった松江。「とき」を急いで松江との

関係を変えようとした先生。すれちがい、傷つきながらも松江は、自己を変える決断をすることができたのでした。

○「とき」をよむ

三つの手記を紹介したが、人間が成長するということはとてもステキなことだとしみじみ思う。子どもが変わる「とき」は、いろいろな関係に、いろいろな時期に訪れるものと思われる。

三つの手記でわかることは、思春期前後は、幼児期からの育ちの内容を再構成して、自分を変える「とき」らしいということである。親との関係がきっかけになることもあれば、友人関係の場合もあるし、教師との関係の場合もあるのである。

「とき」がよめるということは、時代がわかり、自分がわかり、関係がわかって、「めざめている人」として生きていくことである。

(沖繩キリスト教短期大学)

